

アカモズ 英: Brown Shrike 学: *Lanius cristatus*

1. 分類と形態

分類: スズメ目モズ科

全長: 約200mm
 翼長: ♂ 86.5-90.3mm (8) ♀ 82.1-89.2mm (9)
 尾長: ♂ 80.6-90.2mm (8) ♀ 78.6-87.0mm (9)
 嘴峰長: ♂ 20.6-22.2mm (6) ♀ 19.2-20.7mm (7)
 ふしよ長: ♂ 23.1-24.4mm (8) ♀ 23.1-24.9mm (9)
 体重: ♂ 23.9-30.3g (8) ♀ 24.8-35.0g (9)

全長以外は繁殖地における著者らの測定による。(サンプル数)



写真 1. アカモズ成鳥♂(左: 初列風切基部の白斑が大きい個体: 長野県), 成鳥♀(中央: 長野県), 第1回冬羽の幼鳥(右: 北海道)

羽色:

モズ *L. bucephalus* より細身な体型. 雌雄ほぼ同色. 成鳥は上面は赤褐色. 額から眉斑は白く, 体下面は白色から淡い赤褐色. 嘴, 過眼線, 虹彩は黒い. 雄は雌よりわずかに尾が長く, 額の白色部が広く, 背や肩などの上面の赤褐色が鮮やかで過眼線の色が濃い傾向があり, しばしば初列風切の基部に小さな白斑がある. 雌は嘴の基部が雄より淡色で, 脇腹に鱗状の斑がある個体がいる. 稀に雄でもわずかにこの斑のある個体がいる. これらの特徴は個体や時期により差がある. 特に雌の個体差が大きい. 巣立ち直後の幼鳥は全体に灰色だが, 巣立ち後3-4週間程度で成鳥に似た赤褐色の第1回冬羽となり, 全身に褐色の羽縁がある. モズ幼鳥より頭部から尾の上面の赤褐色が鮮やか. 第1回夏羽の時点で全身に幼羽は残らず, 形態からの年齢識別は不可能になる. 成鳥の換羽は巣外育雛期後半に始まり, 同時に嘴の根本から肉色味を帯び始める.

鳴き声:

繁殖地に渡来した雄は目立つ場所で「ギュンギュン, キチキチキチ」などとモズよりもやや低く籠った声で鳴く. 求愛時には他種の鳴きまねも行なう. これらの声は造巣が始まる頃にはあまり聞かれなくなるが, あぶれ雄は遅い時期まで鳴く. 育雛期には雌雄とも外敵の接近時に「ギチギチ…」と濁った声で鳴き, 尾を開閉しながら上下させ警戒する. 警戒レベルが上がると, 合間に「ギュン」と交ぜることがある. 「ギチギチ」という声はモズよりチゴモズ *L. tigrinus* に似ている.

2. 分布と生息環境

分布:

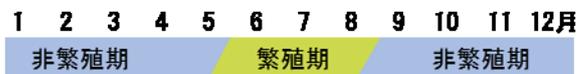
北海道から本州中部, サハリンに夏鳥として飛来し繁殖する. 中国南部, インドネシア付近で越冬するとされるが, 別亜種との識別が難しいなどの理由で, 正確な越冬地は不明である. 個体数の減少が著しく, 繁殖地も局地的であった

め, 環境省レッドリストでは絶滅危惧IBに指定されている. 減少要因は開発などによる繁殖地の環境悪化, 森林火災による越冬地の消失(Imanishi 2002), 越冬地や中継地での密猟などと考えられる. また, アカモズはモズと比較して生息環境の幅が狭く, 減少も著しいため, 環境変化の影響をより受けやすいと考えられている(Takagi 2003).

生息環境:

疎林, 農耕地, 河川敷, 海岸林といった, 草地に木が適度に生えるなど開けた環境に生息. 現在, 比較的的生息数の多い北海道ではこのような環境で繁殖するが, 長野県ではリンゴ園に多い. 他では本州の高原などでごく少数が繁殖する. 大幅な減少以前は人家の庭先など, 今より身近な所で見られる地域もあった.

3. 生活史



繁殖システム:

5-8月にかけて一夫一妻で年1回繁殖するが, 稀に一夫二妻になる場合もあるようだ. 早い時期に繁殖に失敗した場合は営巣をやり直す. つがいごとになわばりを持ち, つがいは年ごとに変わる場合が多いが, 同じつがいで繁殖することもある(図1). 長野県の繁殖地における一定範囲への成鳥の帰還率を調べたところ, 雄45.4% (n=11), 雌45.4% (n=11)で雌雄による差は無かったが, 帰還した雄は全個体が前年と全く同じ場所に帰還したのに対し, ほとんどの雌は前年とは離れた場所へ帰還した.



図 1. つがい関係の変遷の一例. ♂1, ♂3は毎年同じ場所になわばりを構えた. 数字は個体番号

巣:

草木や根, 獣毛やビニールなどでモズに似た椀型の巣を作る. 巣は樹木の茂みにつくられ, 高木の樹冠や低木の根本付近など高さは様々. 雌雄で造巣し, 2-3日程度で外観が完成し第1卵を産むが, その後も数日は時折巣材を補充する.

一腹卵数, 卵サイズ, 卵色:

一腹卵数は4-6卵(羽田・高橋 1968). 繁殖開始が早いほど卵数が多い傾向がある. 卵には白地に褐色斑のものと, 全体が赤味がかかるものがある.

抱卵, 育雛期間:

抱卵, 巣内育雛とも約2週間. 抱卵, 抱雛は雌のみで, その間雄は給餌と, 巣やなわばりの監視を担う. ヒナが成長すると抱雛時間が減り, 雌も頻りに給餌するようになる. 夜間は巣立ちまで雌が巣に留まる.

巣立ち後2-4週間程度は親のなわばりやその周辺で生活するが、次第に自立していく。巣立ちヒナが複数いる場合は、雌雄で雛を分担し、給餌を行なう(羽田・高橋 1968)。

4. 食性と採食行動

様々な昆虫やクモ類、カエルやトカゲなどの小動物も捕る。リンゴ園では電線や杭などの足場の安定した人工物に止まり、飛び降りやフライングキャッチによる狩りが多い。枝葉からついばんだり、ホバリング、ツグミ類のように地面を跳ね歩いて採食することもある。フライングキャッチは飛翔性昆虫が多い時に頻繁に見られ、セミ類やオニヤンマなどを捕る。クロオオアリなどの大型のアリの結婚飛行があった日には、飛翔する女王アリを頻繁に捕食する。モズのように小鳥などの大物を捕えることは少ないが機敏に動けるため、より昆虫食に適していると思われる。繁殖期間中に「はやにえ」も行なう。

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● 繁殖地がリンゴ園に集中

全国的に分布がかなり局所的となったアカモズだが、長野県ではリンゴ園に比較的多く生息しており、2015年には少なくとも約60つがいが確認された。



写真2. アカモズが生息するリンゴ園

リンゴ園に繁殖地が集中する理由は不明だが、アカモズの繁殖に必要な条件はそろっているようだ。営巣木には葉の茂ったリンゴの木が多く選択され、営巣場所は豊富にある。巣立ち成功率は約7割と比較的高く、失敗の要因は大半が捕食によるもので、巣内でヒナが死亡したのは50巣以上のうち1羽だけだった。捕食されなければほとんどのヒナが巣立つため、食物も十分にあると考えられる。

アカモズが生息するリンゴ園は局地的であるうえ、植え替えにより、営巣に適した木がなくなるなどして消失した繁殖地もある。また、県では新矮化栽培という小さい木を密植させ作業効率を高める栽培法を進めており、近い将来環境が大きく変化する可能性がある。今後も研究を進め、アカモズの保全とリンゴ生産との両立を図っていく必要がある。

● モズとの種間関係

アカモズとモズが同所的に繁殖する場合、両種のなわばりは互いに重ならず排他的に分布することが知られる。アカモズの飛来前にモズが先になわばりを形成している場合は、元々のモズのなわばりが一度解消され、モズとアカモズのなわばりが再形成される場合(石城 1966)と、先住のモズの中に割り込むようにアカモズのなわばりが形成される場合(中村 1985)がある。著者の調査地では、元々のモズのなわばりが縮小し、アカモズだけでなく新たなモズも加わり間を埋めるように形成された。

なわばりの分布をみると、アカモズが、よりリンゴ園の多い場所になわばりを構える傾向があった(図2)。早く繁殖を開始するモズはイチイやカラタチ、ノイバラなどの常緑針葉樹や展葉の早い広葉樹を

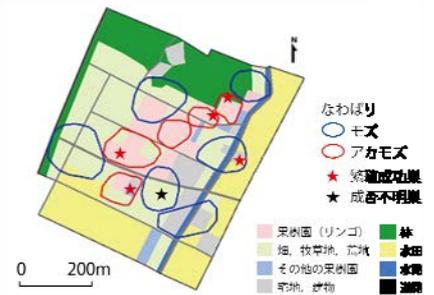


図2. アカモズとモズのなわばり分布と環境

営巣木として選択することが多い。リンゴは周囲の樹木より展葉が遅いため、アカモズ飛来前にはモズはリンゴ園で営巣できない。ちょうどアカモズの飛来時期に葉が開き、営巣可能となるため、アカモズはモズとあまり競合せずになわばりをかまえ、すぐに繁殖を開始できるのかもしれない。

なお、アカモズはモズよりも華奢だが、なわばり争いではアカモズがモズを負かすことも多い。先述の石城(1966)のようにアカモズの飛来によりモズのなわばりが解消された例から考えても、アカモズはモズにリンゴ園へ追いやられているわけではないようだ。

6. 引用・参考文献

羽田健三・高橋庸子. 1968. アカモズの生活史に関する研究 I. 繁殖期. 日本生態学会誌 18: 47-56.
 石城健吉. 1966. モズとアカモズのなわばり関係について. 日本生態学会誌 16: 87-93.
 Imanishi S. 2002. The Drastic Decline of Breeding Population on Brown Shrike *Lanius cristatus superciliosus* at Nobeyama Plateau in Central Japan. 山階鳥研報 34: 228-231.
 中村雅彦. 1985. 異種間のなわばり<モズとアカモズ>. 羽田健三(監) 続々野鳥の生活. pp 129-133. 築地出版, 東京.
 Takagi M. 1996. Sexual Size Dimorphism and Sex Determination of a Brown Shrike subspecies, *Lanius cristatus superciliosus*. Jpn J Ornithol 45: 187-190.
 Takagi M. 2003. Philopatry and habitat selection in Bull-headed and Brown Shrikes. J Field Ornithol 74: 45-52.
 手井修三. 2014. 同所的に繁殖するモズ・アカモズ・チゴモズの繁殖時期と繁殖環境. Strix 30: 1-14.

執筆者

原 星一

1990年生まれ。信州大学に在学中、近所のリンゴ園でアカモズを見つけて以来、絶滅寸前の鳥がなぜこの環境で繁殖するのか知りたくて毎年調査を続けていますが、その答えが見えそうになったり遠のいたりを繰り返しています。青森県へ移住してからも、繁殖期だけ長野県に出向くのが恒例となりました。近年は現地の方々に調査を手伝っていただくことも増えました。アカモズ調査以外でもあちこち駆け回り、チゴモズなどの別の希少種や、夜に見られる鳥を探すなどして寝不足です。いつかはアカモズの越冬地を突き止め、実際に見てみたいです。

